

本号の編集会議の席に、相馬智教授のお姿がみえないのが誠に寂しかった。改めて心から先生の御冥福をお祈りしたい。

ようやく長期成績を検討できる時期になった。会議の席上、本邦の集計成績よりも、個々の施設のきめ細かな follow-up study の成績を知りたいと提言したところ、小生も主題の1つを仰せつかった。藤本氏、藤田氏、小生の長期成績、それから高木氏司会の座談会を通じて、結石再発や胆嚢無石・有石例の予後に多くの共通点が見出された。一方、ビ系石の成因論にもかかわる大きな課題も残された。川井氏は本法評価時の問題点に言及され、藤田氏は EST の近年の展開につき述べられた。田中氏の外科的乳頭切開術後16年目の再発例は、EST 後例に、より長期 follow-up の必要性を示唆するものであろう。

余談になるが、筆者は、消息不明例を皆無にすることを目標に掲げた。中でも最後の1人として残った“38歳・女性”はとりわけ難物であった。過去2回のアンケート調査でも転居先不明であった。今回、本籍地の区役所で、事情を話し戸籍付票を見せてもらい、抹消印で離婚が判明した。そこで実家の原籍地を調べてもらい、その町役場から戸籍付票を郵送してもらったが、再び抹消印が付いていた。それでも実家の現住所がわかり、ついに本人の再婚先を突き止めた。電話をかけたところ、幸せそうな声で“よくわかりましたね”が本人の第一声であった。おかげで、興信所に依頼するか、の話しは立ち消えとなり、共同研究者の松本は予後調査のベテランになっていた。

本特集号が EST の今後の発展に繋がることを念じて後書きを終える。

<池田 靖洋>

<編集> 早期胃癌研究会